

山口哲子全集

第三卷

水原秋桜子
富安風生
山口青邨

大野林火
平畑静塔

監修

明治書院

山口哲子全集

第三卷
俳句集(三)

山口誓子全集 第三卷

三八〇円

著者 山口 誓子

昭和五十二年六月二十五日發行

發行者 明治書院 代表 三 樹 彰

印刷者 大日本法令印刷 代表 田 中 忠

發行所 株式會社 明治書院

千代田區神田錦町一―十六八一〇一V
電話二九四―五三三六 振替東京三―四九九一

山口誓子 第三卷 俳句集(目)

目次

晩刻	一
青女	一〇七
和服	一六九
構橋	二五三

初出百句	三九
解題	三三
解説	三七

晚

刻

昭和二十年

十一月一日
虻よんで倦むこと知らず石路の花

十一月二日
陰深き市井の家に毛絲編む

銀行をよごして砂糖黍しがむ

子等寝ねてより枕邊の夜の長き

生^あれし日を菊の十一月に持つ

十一月三日

汽罐車の金^{きん}の火の粉や秋の暮

暮色濃く鰯焼く香の豊かなる

秋濱^{いさこ}の沙^{いさこ}を膝に弄ぶ

十一月四日

秋濱を下りゆく海の平らまで

甘^い藷^も分つ妻といふには若くして

樹々多き町富田濱甘藷分つ

洋服のしゝむらにさす秋日かな

見るうちにしだいに紅き梅うめ擬もどき

十一月五日

菊咲きし川畑咳をして通る

空氣銃撃ちし音菊ひやゝかに

秋風は輓馬のところ過ぎけるか

稻の上にはかに星を落しける

十一月六日

海しぐれ求むる方に虹もなく

まだ點けねども絨毯に電熱器

十一月七日

街燈の下にこほろぎ鳴き残る

驛離れ來れば星天しぐれそむ

十一月八日

斧あてし枝の切口冬に入る

着て立ちて羽織のしつけ抜かるなり

手の寒さ江の家々に燈はあれど

さいはひは寒星の座を指し得たり

十一月九日

燠を搔く音す夜寒の湯にあれば

菊さむくなる湯の中に膝かゝへ

十一月十一日

手を洗ひ寒星の座に對ひけり

十一月十二日

柿食うて入海の夜のしづかなる

十一月十三日

病起き秋風近く侍し得たり

十一月十四日

寒に向ひ病の弟子を酷愛す

十一月十五日

しぐれては日あたるところ牛繫ぎ

十一月十六日

水漬を滴る良寛のむかしより

十一月十七日

家の裡燻りて風邪のわれ哀れ

十一月十七日

とろゝ汁吾に齡の高さなし

薄暮にてとろゝの薯を揺りゐたり

十一月十八日

とろゝ汁うん雲のり柄のりのごと恭敬す

てのひらに載せてとろりととろゝ汁

道すがら見し稻扱の手を眞似て

十一月十九日

晶々と寒月に照る木屑あり

日のあたるところに出でて風邪癒えず

仕事場に鐵尺を見て風邪癒えず

十一月二十日

風邪癒えず月蒼き夜のつゞきたり

十一月二十一日

床下に生きものゐるや風邪癒えず

十一月二十二日

もたらしぬ鵜を風邪の床にまで

鵜死して翅擴ぐるに任せたり

頸垂れて鵜わが掌につゝまるゝ

やゝ痛き鵜の爪の愛しさよ

掌^ての鵜かなしやわれの脈うてり

風邪の手を出して鵜を握るかな

鵜鳥握れば爪のつゝましき

筆りたる鶉をしばしみつめたり
羽毛にて鶉の瞑ぢし眼は見えぬ
妻も世に古りて鶉を炙りけり
鶉の身守りし羽の抜けやすし
胸に刃をあつと鶉のことなるか
焼鶉うましや飯いひとともに噛み
蘆の花賑やかにしてわれひとり
まかげしてわが立ちどまる蘆の花

十一月二十四日

大綿やアラギを買ふ町の書肆

風邪癒えてつめたき空氣吸ふまでに

風邪癒えし幼なと海を見に來きたり

十一月二十五日

石炭を掬へる音の夜明がた

藁塚の夜となる頃を通るなり

藁塚を照らす燈驛の燈もまじる

トラツクの燈に白かりし枯野犬

十一月二十六日

冬の夜の驛には鐵路賑やかに

十一月二十七日

白鳥座さむざむ東京への打電

寒々と懷中燈の圓の土

十一月二十八日

恐ろしく早き暮色や風邪ごもり

褥中の足のつめたく病みゐたり

十一月二十九日

手の寒さ驛構内の廣ければ

町角に寒星の天向きを變ふ

十一月三十日

こがらしにすぐとさからふ夜の木々

蒼々と障子張り替へられるたり

十二月一日

咳すれば暮るゝ景色の鮮明に

冬の燈がさして町川走せるたり

驛を出て汽車迅からず夜の霧

こがらしの絶えて鬱々たる星座

十二月二日

夜寒さの肩を挽がるゝ如くなり

十二月三日

沖は昨夜^{よべ}寒かりしとぞ沖を見る

残る世のけふのさむさにめをさます

朱を拭きてのちの雅印の寒むざむと